

美的判断の意味論を修正する

檜岡 寛己 (無所属)

本発表では、美的判断を意味論の観点から説明する近年の研究を取り上げ、これらの研究で提案された美的判断の意味論には説明が困難な問題があり、それゆえに美的判断の意味論を修正することを提案する。

私たちは、常日頃から、芸術作品であれ日常にありふれた事物であれ、美的対象に美的判断を下している。例えば、私たちは「《モナ・リザ》は美しい」という美的判断を下している。本発表では、このような美的判断に対して「美味しい」のような個人的趣味述語の意味論を応用する研究に焦点を当てる。

では、美的判断の意味論に応用されているのはどのような立場による意味論なのだろうか。それは文脈主義と相対主義である。文脈主義によれば、美的判断は、趣味に相対化された隠れた指標的な構成要素を含み、異なる趣味のもとで異なる命題を表す。相対主義によれば、美的判断は、文脈を含まないため、趣味中立的な命題を表しているが、この命題の真理値は世界と趣味に対して決定される。

しかし、これらの立場のどちらにも説明することが困難な問題があるように思われる。本発表で示す問題は、「だったら、最初からそう言ってくれよ問題」と「言語化に苦戦する話し手問題」である。この二つの問題は、私が美的談話の実践から取り出した問題である。「だったら、最初からそう言ってくれよ問題」は、命題に含まれている文脈が明らかになっていない美的判断を話し手が下し、その後、聞き手が話し手からその文脈を提示された際に「だったら、最初からそう言ってくれよ」と発話する事例についての問題である。「言語化に苦戦する話し手問題」は、一人の話し手が一見矛盾するように思われる複数の美的判断を下した際に、実際に聞き手はその美的判断を矛盾しているとみなさない事例についての問題である。私の見立てでは、文脈主義は「だったら、最初からそう言ってくれよ問題」を説明するのに苦しみ、相対主義は「言語化に苦戦する話し手問題」を説明するのに苦しむ。このように、文脈主義にも相対主義にも困難な問題があることを示す。

最後に、私は、Nguyen(2019)と Stalnaker(1978)を参照し、三つの問題を説明できるフレームワークを提供する。それは意味論的分析と語用論的分析を組み合わせることによって三つの問題を説明するフレームワークである。Nguyen(2019)は、総称文は不完全な命題を表すが、その命題が話し手の意図によって補完されることで命題が完全に決まると提案している。私は、Nguyen(2019)におけるこの分析を美的判断にも応用した上で、Stalnaker(1978)による共有基盤という考えを踏まえて、共有基盤を参照したり更新したりする私たちの実践から話し手の意図によって命題が補完されることを説明することで、三つの問題を説明することができるフレームワークを提供する。